社交不安障害の短期療法プロセスにおける情動知能の変化及び情動知能が不安感情に及ぼす影響について

Time-series analysis for change on levels of emotional intelligence and influence of change on anxiety:
Case based study of social anxiety disorder in brief psychotherapy

本　田　　泉

【問題と目的】

社交不安障害（Social Anxiety Disorder；SAD）は対人場面等で不安や恐怖を抱くがために、社会生活において様々な支障をきたす精神疾患の一つである。対人場面でシャイになったり、神経質になったり、不安を抱くというのが主な症状であり、また症状は慢性的に持続する。そのため患者は長期に渡り苦しむことになるのであるが、全般性不安障害やうつ病など、他の精神疾患と重複して診断されることも多い。

ClarkとWells（1995）は、SAD患者が自分自身について歪んだ、否定的な信念を抱く認知プロセスを提唱した。またRapeeとHeimberg（1997）は、SAD患者は、自分たちが他者からどのように見えているかについて心的イメージ（mental representation）を頭に描いていると述べている。この心的イメージは記憶の中にある自分自身のイメージ、写真、身体症状、他者からのフィードバックといった多くのものから影響を受けているという。この他の様々な先行研究においても、SAD患者の自身に対する認知の歪みが指摘されている。

またSADの人は、社交場面において他者の様子よりも自分自身に注目する傾向がある。例えば、社交場面においてSAD患者は、「自分はつまらない人間だ」「不安な様子に気づかれたら、相手に不信に思われるだろう」「面白い話題を提供しなければならない」などの自身の中の否定的な信念、思い込み、ルールを抱き、結果としてうまく振る舞えないといったことが生じてしまう。こうした緊張場面における自己注目（self attention）が、SAD患者に社交場面や社会適応上重要な手がかり（相手の身振りや、目線、相槌などのサイン）を無視したり、見逃すといったことを引き起こす（Clark & Wells, 1995）。このように社交不安から生じる社会的不適応には、他者や自己に対する認知の偏りや歪みが関わっていると考えられる。

一方、社会適応の指標として用いられている概念に情動知能（emotional intelligence；EI）がある。これについて早くから研究を行ってきたMayerのグループは情動知能を「①情動を知覚すること（情動知覚）、②思考を助けるために利用し作り出すこと（情動表現）、③情動と情動の知識を理解すること（情動理解）、④情緒的知的な成長を促すように情動を制御すること（情動管理）」の４つの側面から定義した（Mayer & Salovey, 2000；Mayer, Caruso, Salovey, 1997）。情動知能は様々なライフイベントに影響を及ぼすと考えられる。一般的に情動知能が低い人は、人生におけるストレスを伴う出来事への適応が難しく、抑うつ、絶望といった人生におけるネガティブな結果が生じやすく、また

情動知能の高い人は人生におけるネガティブな結果に柔軟に対応できると考えられてきた(Ciarrochi, Forgas, Mayer, 2001)。

こうした仮説を実証しようと、情動知能についてこれまで様々な研究が行われてきたが、Ciarrochiの多因子情動知能尺度（Multi - factor Emotional Intelligence Scale ; MEIS）では、そうとも言い切れない結果が明らかになっている（Ciarrochi & Anderson, 2000)。MEISは上述したMayerのモデルにおける４つの下位能力である「情動知覚」「情動表現」「情動理解」「情動管理」に対応する下位テストから構成され、それぞれに対する被検査者のパフォーマンスを査定していくものである。結果は、情動知覚力（Emotional Perception）とストレスや精神保健の間には相関が無いこと、また情動知覚力が高い人は、低い人よりもストレスの影響を受けやすい傾向が認められた、といったものであった。

情動知能が感情へ与える影響について、アレキシサイミアの観点から論じられることがある。例えば情動知能とアレキシサイミアとの間には、高い負の相関関係が指摘されている（Parker, Taylor, Bagby, 2001 ; Taylor & Bagby, 2000 ; Dawda & Hart, 2000)。アレキシサイミアは和名で「失感情症」と呼ばれるように、自己や他者の感情を察する能力の低さを指している。高アレキシサイミア者の情動対処方略は概して不適応的であり、アルコール依存や過食に走ったり、また攻撃性の高さも見られる。しかし彼らは不適応行動の原因が自分のストレスであることには気づかず、対処に感情を用いることが出来ない。その結果パニック障害やパニック発作を引き起こしやすいと言われている（Ciarrochi, Forgas, Mayer, 2005)。いずれにせよ、情動知能が感情に与える影響については検討の余地が多く残されている。

以上のような先行研究を鑑み、本研究では社交不安を持つ者の認知の歪みに注目し、事例介入を通して、自分の感情を洞察する力、つまり情動知能が日々どのように変化するのか、そしてそれが状態不安にどのように関わっているのかを時系列データを用いて検討することを目的とする。

【事例と介入法】

事例

事例は、某都市にある私設心理相談室に来談した４名の社交不安障害のクライエントのものである。相談内容はそれぞれ異なり、一定の診断基準によって事例が統一されているわけではない。年齢は20代～40代で、全て女性であった。全ての事例において時間制限の短期療法に導入された。平均セッション回数（標準偏差）は4.5回±0.5、ベースライン期の平均日数は25.3日±6.8、介入期の平均日数は43.5日±7.5、ドロップアウトした事例Cを除くフォローアップまでの平均日数は35.7日±2.4であった。尚、クライエントの来談時期は事例により異なることを付け加えておく。以下に各事例の概略を示す。

事例Ａ：20代既婚女性。表面的には明るく振る舞っているものの、人付き合いに苦痛を感じ来談した。

事例Ｂ：20代独身女性。大学卒業後、就職するも間もなく退職し、実家で引きこもり生活を送っていた。自分に自信が無く他人の反応を気にしすぎてしまったり、時には泣いてしまうこともあるという。

事例Ｃ：40代独身女性。子どもの頃から人付き合いが苦手で、話していると緊張して赤面したり、涙が出そうになるという。クライエントの希望により、５回目の最終セッションで終結とし、フォローアップは来談しなかった。

事例Ｄ：40代既婚女性。他者恐怖や自分への自身の無さを訴えていた。人が大勢いる場所

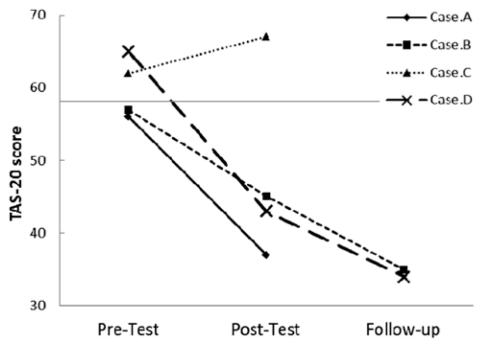

Figure 1　アレキシサイミア傾向のケース別推移
（横線はカットオフ＝58点）

にいると、頭が真っ白になるという。

各事例においてPre-Test（インテーク時）、Post-Test（最終セッション時）、Follow-up時の計３回、アレキシサイミア傾向を測定する『TAS-20』を実施した。結果をFigure1に示す。尚、CaseAとCaseCのFollow-upデータには欠損がある。

倫理的対応

本論で用いるデータなどは、全て相談者の許可を得たものである。経験年数20年以上の臨床心理士が、自身で開設している私設心理相談室のホームページにあらかじめ研究の目的を記載している。クライエントはそれを閲覧し来談した。来談したクライエントに改めてインフォームド・コンセントを行い、上記内容に合意が得られたクライエントのみセラピーに導入された。

本論で使用したデータはこの一連の流れから得られたものであり、またクライエントの許可を得た上で筆者が譲り受けたものである。

事例の分類

Pre-Test、Post-Test、Follow-upの３時点で、社交不安の程度を測定するため、各クライエントへLSAS-J（Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版，朝倉ら，2002）を実施した。下位尺度として「恐怖感・不安感」と「回避」を測定することが可能で、それぞれ24項目、計48項目から構成されている。Pre-Test時における４名のLSAS-J得点の平均値は78.8±14.4であった。

社交不安の臨床的変化の有無の判定にはPre-Test時を基準とした、以下の２基準を使用した。

① 総合得点のRCI（reliable change index）が基準値1.96を上回ること
② LSAS-J得点の変化率が50％を上回ること

本研究では上記２基準のうち、双方を満たした場合には社交不安レベルが「低下した」、片方を満たした場合は「中程度変化した」、双方とも満たさなかった場合は「変化なし」とみなした。

RCI（reliable change index）とは症状の臨床的に有意な変化（clinical significance；CS）を説明しようとJacobson, Follette, Revenstorf（1984）によって作られた概念であり、標準誤差によって導かれる。

$$\mathrm{RCI}=\frac{\bar{X}_1-\bar{X}_2}{\mathrm{SE}}=\frac{\bar{X}_1-\bar{X}_2}{S_1\sqrt{1-r_{xx}}}$$

$\bar{X}_1$は介入前の得点、$\bar{X}_2$は介入後の得点、S_1は健常群の標準偏差、r_{xx}は信頼性係数である。計算の結果RCI≧1.96であった場合に臨床的に有意な変化があったと判断することができるとされている。

さらにLecrubier（2002）は精神薬理学的見地から治療反応を検査することで治療効果判定を行うことを提案している。これによると、症状の75％～100％が２週間～６ヶ月間に連続して減少した場合に寛解し、さらに症状が６ヶ月以上現れなければ回復したと考えられる。また50％以上の変化があれば治療に反応したと考えられ、25～49％の変化であれば部分的に治療に反応したと考えることができる。本研究ではこうした見地を基に、LSAS-J 得点に50％以上の変化率が見られた

場合を回復したとみなした。

RCI算出に当たり、S_1は藤井（2012）にて算出されたLSAS健常者スコアの標準偏差（SD=21.0）を、r_{xx}は朝倉ら（2002）によって算出されたCronbachのα係数（α=0.95）を使用した。

これらの基準に基づき各ケースを検討した結果をTable1に示す。まずCaseA、CaseDについては、Follow-up時に社交不安が臨床的に有意に回復したものと分類できる。特にCaseAはPost-Testですでに社交不安が低下し、Follow-upまで持続したことを考慮すると、寛解したと考えられる。CaseBはRCIより社交不安が有意に低下していることが確かめられた。しかしFollow-up時においても社交不安レベルは依然高いままであり、分類としてはわずかに回復したものとなるであろう。CaseCについては上記２基準を満たすことは無かった。よって変化の無かったケースと分類できる（Table1, Figure3）。尚、事例Cはドロップアウトしたためにフォローアップのデータを欠いている。

Table 1　LSAS得点変化率及びRCI

	Pre-Test	Post-Test		Follow-up	
	change（%）	change（%）	RCI	change（%）	RCI
Case A	–	79.03%	10.43*	77.42%	10.22*
Case B	–	29.73%	4.69*	27.03%	4.26*
Case C	–	10.84%	1.92	–	–
Case D	–	43.75%	8.94*	71.88%	14.69*

*RCI＞1.96

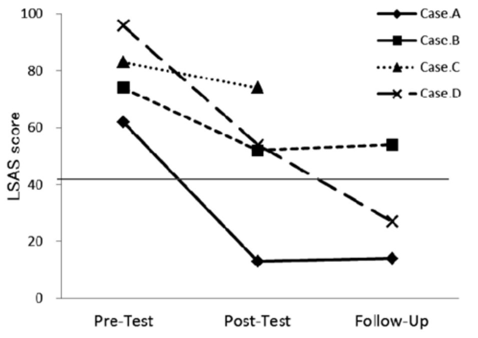

Figure 2　社交不安レベルのケース別推移
（横線はカットオフ＝42点）

【方法】

分析対象

Clにはホームワークとして、POMS短縮版とEQS、二種類の心理尺度に毎日回答することを求めた。

POMS短縮版：POMS短縮版とは、「緊張－不安」「抑うつ」「怒り－敵意」「活気」「疲労」「混乱」という６つの感情成分を測定するために開発された尺度であるPOMSの短縮版で、各下位尺度につき５項目、合計30項目から構成されている。本論では、このなかから「緊張－不安」の質問項目のみ使用した。教示文は、原版の「過去１週間のあいだの……」を「今日１日の気分をあらわすのに一番あてはまる数字を○で囲んでください」に変更した。なお数値は、素点をＴ得点に換算して使用した。

EQS：EQSとは情動知能を測定するために開発された尺度で、「自己対応」「対人対応」「状況対応」という三つの領域を構成する、合計21個の下位因子から構成されている。本論では、「自己対応」領域の対応因子のひとつである「自己洞察」の質問項目のみ使用した。「自己洞察」は、下位因子である「感情察知」３項目と「自己効力」３項目の合計６項目から構成されており、前者は自己の感情状態を認知する能力を、後者は自分の現在の感情を正しく表現して他者に伝えることができる能力を、それぞれ測定する。教示文は、原版の「各文章を読んで……自分にもっともよくあてはまる……」を「今日の自分にもっともよくあてはまると思う数字ひとつを○で囲んでください」に変更した。なお数値は、素点を個人内標準化した得点を使用した。

分析方法

マルチプル・ブレイクポイント検定（Multiple Breakpoint Tests）により情動知能の構造変化の有無を確認した。線形回帰モデルを最小二乗法にて推定し、未知で複数のブレイクポイントに対して、残差平方和を最

小化するブレイクポイントと係数推定値を求める分析法である。

その後、分割時系列分析の一種であるシミュレーション･モデリング分析（Borckardt, J.J. et al, 2008）にて構造変化前後における情動知能のレベル変化を検討した。これは時系列データの実測値と同じサンプル数だけ、自己相関統計量を備えている確率過程を数千回のシミュレーションによる正規乱数の発生を介して生成されたものと、この確率過程が実測値の位相ベクトルと相関する可能性（効果量）がどれくらいあるかを検証する分析法である。ブートストラップ法やマルコフ連鎖モンテカルロ法に類似した手法である。

最後に原系列データの差分を対数変換した変動率を用い、不安の変動率を被説明変数、情動知能の変動率を説明変数として時系列回帰分析による弾性値（回帰係数）の推計を行い、情動知能が不安に及ぼす影響を検討した。

尚、シミュレーション・モデリング分析はSMA を、マルチプル・ブレイクポイント検定及び時系列回帰分析はEViews8（HIS）を用いた。

【結果】

まず各事例における一連の情動知能の変動について、有意な構造変化が見られるかを調べるためにマルチプル・ブレイクポイント検定を行った。ブレイクポイント（Breakpoint; BP）の臨界値は時系列データのトリミングを前後15%、有意確率５%、ブレイクポイントの最大数を２にして推計した。その結果CaseAにおいて１時点のブレイクポイントが検出され、その日を境に情動知能のレベルに有意な構造変化が認められた。ブレイクポイントの発生日は、インテーク面接から46日後であった。その他の事例に有意な構造変化は認められなかった（Table2）。

次に各ケースについてシミュレーション・モデリング分析を行い、情動知能のレベルの変化を検討した。尚、本研究ではシミュレーション回数を10000回に設定した。CaseAについてはマルチプル・ブレイクポイント検定で算出された結果を基に、インテーク面接から46日後（Ⅰ期)、および47日後からフォローアップ前日（Ⅱ期）の２セグメント間について検討を行った。その結果、Ⅰ期とⅡ期の間でレベル変化が有意であり（r=.859, p<.05)、効果量大の有意な正のレベル変化が認められた（Table3, Figure3)。

ブレイクポイントが認められなかったCaseB･CaseC･CaseDについては１回目セッション前日までのベースラインに当たる期間をⅠ期、１回目セッションから最終セッション前日までの介入期をⅡ期、最終セッションからフォローアップ前日までのフォローアップ期をⅢ期とし、CaseAと同様に情動知能

Table 2　マルチプル・ブレイクポイント検定の結果

	Break Test	F-statistic	Critical Value
Case A	0v.s.1*	15.29	11.47
	1v.s.2	2.20	12.95
Case B	0v.s.1	3.31	11.47
Case C	0v.s.1	6.37	11.47
Case D	0v.s.1	11.01	11.47

*p < .05

Table 3　自己相関及びシミュレーション・モデリング分析の結果

	Stage Ⅰ		Stage Ⅱ		Ⅰv.s.Ⅱ
	N	M±SD	N	M±SD	r
Case A	56	41.77±5.65	52	58.87±4.43	0.859*
Case B	19	50.80±15.21	40	46.36±6.56	-0.200
Case C	18	48.71±10.47	42	50.55±9.62	0.085
Case D	31	48.11±6.72	56	45.68±7.78	-0.155

	Stage Ⅰ+Ⅱ		Stage Ⅲ		Ⅰ+Ⅱv.s.Ⅲ	Total
	N	M±SD	N	M±SD	r	pAR(Lag 1)
Case A		−		−	−	0.966
Case B	59	47.79±10.39	34	53.84±7.75	+0.293*	0.126
Case C		−		−	−	0.088
Case D	87	46.55±7.51	34	58.84±10.01	+0.555***	0.392

***p < .001, *p < .05

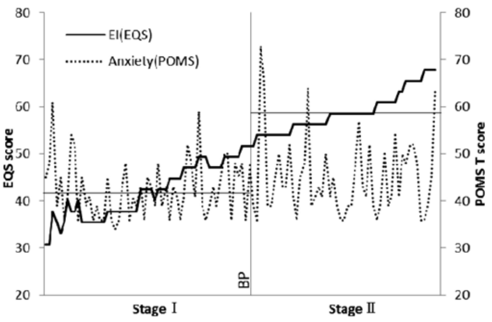

Figure 3　CaseAにおける情動知能レベルの時系列変化
（Ⅰ期v.s. Ⅱ期）

レベルの変化を検討した。検討はⅠ期からⅡ期にかけての変化（Ⅰ期v.s. Ⅱ期）と、Ⅰ期～Ⅱ期からⅢ期にかけての変化（Ⅰ期＋Ⅱ期v.s. Ⅲ期）の二通りの組み合わせで行った。後者の組み合わせで検討を行ったのは、セッションが終了してから初めて現れる効果を検証するためである。

まずCaseBであるが、Ⅰ期v.s. Ⅱ期、Ⅰ期＋Ⅱ期v.s. Ⅲ期について検討を行ったところ、前者に有意な変化は見られなかったものの（$r=-.200$, *n.s.*）、後者に有意な正のレベル変化が見られた（$r=.293$, $p<.05$）（Table3, Figure4）。

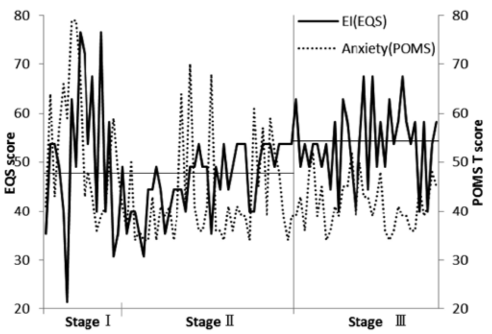

Figure 4　CaseBにおける情動知能レベルの時系列変化
（Ⅰ期＋Ⅱ期v.s. Ⅲ期）

同様にCaseDもⅠ期＋Ⅱ期v.s. Ⅲ期において有意な正のレベル変化が見られ（$r=.555$, $p<.001$）、効果量大の有意な正のレベル変化が認められた（Table3, Figure5）。

CaseCであるが、ドロップアウトしたた

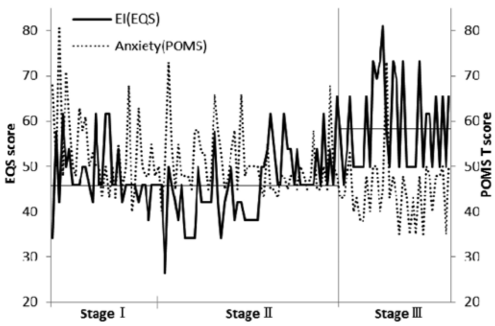

Figure 5　CaseDにおける情動知能レベルの時系列変化
（Ⅰ期＋Ⅱ期v.s. Ⅲ期）

めⅠ期v.s. Ⅱ期のみについて検討を行った。その結果、情動知能のレベルに有意な変化は見られなかった（$r=.085$, *n.s.*）（Table3, Figure6）。

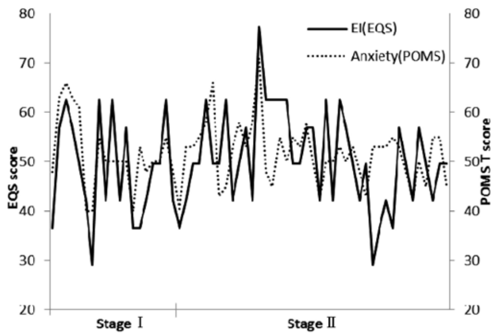

Figure 6　CaseCにおける情動知能レベルの時系列変化
（Ⅰ期v.s. Ⅱ期）

次に不安の変動率を被説明変数、情動知能の変動率を説明変数とし、ブレイクポイントを考慮した時系列回帰分析を行った。変動率は原系列データの差分を対数変換したものである。まずCaseAについては有意な構造変化が認められ、ブレイクポイント発生日はインテーク面接から46日後であった。構造変化前では$\beta=.528$と有意な弾性値が認められなかったが（$t(54)=.781$, *n.s.*）、変化後に$\beta=-4.245$となり有意な負の弾性値が認められた（$t(50)=-3.977$, $p<.001$）。これよりCaseAでは情動知能と不安の間には関連の無い状態から、前者が後者に対し負の影響を及ぼすように変化したことが示唆され

Table 4　時系列回帰分析の結果

	Coefficient （β）	Std.Error	t-Statistic （t）	Prob. （p）
Case A（構造変化前）	0.53	0.68	0.78	0.4363
（構造変化後）	-4.25***	1.07	-3.98	0.0001
Case B	0.02	0.09	0.23	0.8155
Case C	0.20*	0.07	2.65	0.0105
Case D	0.18	0.14	1.22	0.2239

*** $p<.001$，* $p<.05$

た。また有意な構造変化が認められなかったCaseB・CaseC・CaseDについては、時系列データ全体の弾性値を推計した。その結果、CaseCにおいてβ=.196となり、有意な正の弾性値が認められ（t（58）=2.647, p<.05）、情動知能が不安に対し正の影響を及ぼすことが示唆された。しかしCaseBでは弾性値がβ=.020（t（91）=.234, *n.s.*）、CaseDがβ=.177（t（119）=1.223, *n.s.*）となり、この２事例においては有意な弾性値は認められなかった。以上の結果をTable.4に示す。

【考察】

本研究では社交不安の事例における情動知能の推移と、それが不安に及ぼす影響について検討を行ってきた。まずセッションを通して情動知能が有意に変化したCaseA、CaseB、CaseDに注目する。これらはどれも社交不安に大きな低下あるいは中程度の低下が見られた事例である。

まずCaseAであるが、情動知能に構造変化が発生していることや、時系列回帰分析より情動知能の変動が不安の変動に対し負の影響を与えていることが明らかになったことを考慮すると、情動知能が１％高まるごとに不安が弾性値の分だけ低下し、また逆に情動知能が１％低下すると不安が弾性値の分だけ高まったと考えられる。このようにCaseAのクライエントには、情動知能の不安感情への影響が見られた。一方CaseDのクライエントには情動知能と不安の間に関連性は見いだされなかった。これについて検討を加えるとすれば、別の要因が不安へ影響を与えた可能性が考えられる。そしてその要因が、情動知能と不安の関係を媒介している可能性がある。その正体が何であるかは、今後検討が望まれるところである。この点についてはCaseBについても同様であろう。

これに対し情動知能のレベルに変化が見られなかったCaseCは、時系列回帰分析より情動知能の変動が不安の変動に対し正の影響を与えていることが明らかになった。つまり情動知能が高いほど不安が高まり、また情動知能が下がるほど不安が低下すると推測される。これは他の３事例とは逆の現象である。

本研究で扱ったケースは４例と数は少ないものの、各ケースの特徴から次のようなことが言えるだろう。①社交不安レベルが低下する者は情動知能レベルが上昇する、②社交不安レベルの変化が中程度の者は情動知能レベルが若干上昇する、③社交不安レベルに変化が見られず高いままの者は、情動知能のレベルも変化せず低いままであり、情動知能の上昇は社交不安を高めることが考えられる、という３点である。

ここで③の考察の元であるCaseCに注目してみる。冒頭でCiarrochi（2000）の研究を引き合いに出し、「情動知覚力が高い人は、低い人よりもストレスの影響を受けやすい傾向がある」という示唆が得られていることを述べた。これを③に当てはめると次のようなことが考え得るのではないだろうか。「情動知能が高くなることはストレスを感じやすくさせ、社交不安の上昇を招く。それを防ぐためには情動知能が低い状態、つまり自分の感情に気づきにくいことが望ましい。」実際にCaseCの結果に注目すると、TAS-20からは他の３ケースに比べ高いアレキシサイミア傾向、つまり「自分の感情に気づきにくいという特性」を有していることが明らかになっている。冒頭に紹介したParkerらの先行研

究において、「情動知能がアレキシサイミアと高い負の相関関係にある」ことが示唆されたことを紹介したが、CaseCの結果はこの先行研究を支持していると考えられるのではないだろうか。

以上、社交不安の事例における情動知能の変化と、それが不安に及ぼす影響を時系列的に検討してきた。最後に付け加えなければならないことがいくつかある。まず不安の測定方法である。４事例のクライエントの日次データはPOMS短縮版を用い、社交不安尺度を用いたわけではない。POMSを使用したのは項目数が少なく、毎日データを記録するにあたり、クライエントの負担を減らすという意図の下である。しかし社交不安のレベルを記録するのであれば、本来であればそれに見合った尺度を用いるべきであろう。日次データを取りやすい、クライエントに負担の少ない社交不安に関する心理検査の開発が求められ、またそれを用いて再度本論のような検証が必要であろう。

また、本論では情動知能の影響による「不安感情」の時系列的変化を追ったが、この感情は基底気分である抑うつの影響を受けると同時に、混乱した思考の影響を受けることが推測される。また反対に、不安感情が抑うつや混乱思考に影響を与える可能性も考えられる。さらには情動知能が直接不安感情へ影響を与えずとも、抑うつや混乱した思考を介し影響を及ぼすこともあるだろう。個々の感情はそれぞれが互いに影響を及ぼしあっているものであるのだから。今後の展望として、情動知能が不安感情へ影響を与えるメカニズムについて、他の感情との関連も踏まえ、システム的な検討を行っていくことが望まれる。

【引用文献】

1）朝倉, 井上, 佐々木, 佐々木, 北川 ,井上, 傳田, 伊藤, 松原, 小山, 2002；Liebowitz Social Anxiety Scale（LSAS）日本語版の信頼性および妥当性の検討 ; 精神医学44, 1077-1084

2）Borckardt, J.J.：SMA-Version 9.9.28-Simulation Modeling Analysis program for short streams of time-series data（Freeware）and User's Guide; 2006. http://clinicalresearcher.org/software.htm

3）Borckardt, J.J., Nash, M.R., Mur- phy, M.D., Moore, M., Shaw, D., & O'Neil, P.（2008）; Clinical Practice as Natural Laboratory for Psychotherapy Research ; A Guide to Case-Based Time-Series Analysis. American Psychologist, 63, 77-95.

4）Ciarrochi, J., Deane, F., & Anderson, S.（2000）; Emotional intelligence moderates the relationship between stress and psychological adaptation, as measured by depression, hopelessness, and suicidal ideation ; Manuscript submitted for publication.

5）Clark, D.M & Wells, A.（1995）; A cognitive model of social phobia. In R.G. Heimberg, M.R. Liebowitz, D.A. Hope, & F.R. Scbneier.（Eds）; Social phobia : Diagnosis, assessment, and treatment , 69-93. New York : Gulford.

6）Dawda, D., & Hart, S. D.（2000）; Assessing emotional intelligence : Reliability and validity of the Bar-On Emotional Quotient Inventory（EQ-i）in university sutudents. Personality and Individual Differences, 28, 797-812

7）藤井（2012）；社会不安障害の認知機能に関する研究

8）Jacobson, N. S., Follette, W. C. & Revenstorf, D.（1984）; Psychotherapy outcome research: methods for reporting variability and evaluating clinical significance. Behavior Therapy 15, 336-352.

9）Joseph Ciarrochi, Joseph P. Forgas, John D. Mayer（2001）; EMOTIO - NAL INTELLIGENCE IN EVERY- DAY LIFE（中里浩明, 島井哲志, 大竹恵子, 池見陽（2005）; エモーショナル・インテリジェンス ―日常生

活における情動知能の科学的研究―）；ナカニシヤ出版
10）Lecrubier, Y.（2002）； How do you difine remission? Acta Psychiatrica Scandinavica, 106（Sippl. 415）, 7-11
11）Mayer, J.D., & Salovey, P.（1997）; What is emotional intelligence? In Salovey, P., & Sluyter, D.（Eds.）, Emotonal Development and emotional intelligence : Educational implications. New York: Basic Books
12）Mayer, J. D., Caruso, D., Salovey, P.（2000）; Emotional intelligence meets traditional standards for an intelligence. Intelligence, 27, 267-298
13）Parker, J.D.A., Taylor, G.J., Bagby, R.M.（2001）; Relationship between alexithymia and emotional tinelligence. Personally and Individual Differences, 30, 107-115
14）Rapee R.M. & Heimberg R.G.（1997）; A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia ; Behavior Resarch and Therapy, 35, 741-756.
15）Taylor, G.J., Bagby, R.M.（2000）; Overview of the alexithymia construct. In R. Bar-On & J.D.A. Paker（Eds.）, Handbook of emotional intelligence, 40-67. San Francisco : Jossey-Bass.